

「ありがとう」それが私の生きる力

徳之島町立神之嶺小学校 六年 田之畑 果奈子

「ありがとう。」

私は、その言葉で生きる力がわいてきた。チチチチ……。小鳥のさえずりと共に、私は朝ご飯探しへ出かけた。ガジュマルの根の奥にひっそりとある私の家からはい出る。によると小道を歩いていると、ほら穴に住んでいるアマミノクロウサギのアマさんにばったり出会った。木の枝をつえ代わりにして、自分の体験話を仲間のウサギに聞かせているお年寄りだ。私の大好物のえさでもある。やわらかい毛が、風になでられ、ふつくらとしたおしりが私に向いていた。私は、さつと木のかげにかくれ、よだれがでそうなのをがまんしながら、アマさんにかけてあいさつを必死で探した。

「今日もやつぱりだめだ。」

どうしても食べられない。朝食をのがした私を責める自分が、少しおかしく思えてきた。私は、めずらしいハブだ。自分でも何となく気付いている。もともとハブは夜行性だが、私は朝が大好き。朝の空気は気持ちがいい。しかも、この島の森の空気は、特に新鮮で、おいしく、ネズミやウサギなどの動物を

食べなくても、十分生きていけるのだ。

草のしげみから、私の仲間のハブがやってきた。ハブの中でもきょう暴なやつらで、いつも私に悪口を言ってくる。

「やい、おく病者。年老いたアマさんも食べることできないなんて、情けない。」

そう私に言い残すと、草のしげみに去っていった。もの悲しいカラスの鳴き声が聞こえた。気がつくと、夕焼けが黒い雲につつまれながら、海の水平線へとしずんでいった。私も、とぼとぼと家へ向かった。

その夜、私は、自分のことについて考えていた。今日、あいつらが言ってきたことが頭から離れない。私は、おく病なのか。ハブは強くないといけないのか。おだやかな性格ではだめなのか。アマミノクロウサギを食べないといけないのか。このことばかりが頭の中でぐるぐるをまわすようにぐるぐる回っていた。夜中になっても眠れず、私は、家の外へ出た。夜の森は、暗やみに包まれた世界で、きのこがあやしげに光っていた。

「やい。おく病なやつ。」

とがった声が聞こえた。あいつらだ。どうしよう。私はこわくなり体がふるえた。

「なぜ、お前がこんな時間にいるんだ。」

そう言われながら、首や腹、しっぽ、どこもかしこもかまれた。痛かった。くやしかった。体よりも心の中に強い痛みがズキズキとはしった。

「私は、このハブの世界にいていいのかな。」

これまで、人間が住んでいる町に行って、つかまっ
てしまったり、もどってこられなくなったりした仲
間はたくさんいる。いつそのことハブの世界から逃
げ出し、人間の世界で一生を終えよう。冷たい雨が、
降っていた。葉っぱのつゆに、うつむいた顔が写っ
ていた。

「だれか助けて。」

だれかの声がした。奥のほら穴からだった。近づい
てのぞいてみると、アマさんが苦しそうに、横たわ
っていた。先ほどの雨で、杖をすべらせて転んだよ
うだ。すりきずが痛々しく見える。私は、ガジュマ
ルのつたをつたって、ほら穴に飛びこんだ。穴の中
は、真っ暗で、虫の目が光って見える。しけた土
のおいが生ぐさく感じた。アマさんの体をおし上
げようとしても、ぬれていて岩のように重い。全身
に力を入れる。そのとき、だれかが私のしっぽを上
から引き上げてくれるのが分かった。あいつらだ。
今まで、悪口を言っていたあいつらが、私を助けて
くれている。ようやく、はい上がる事ができた。

あいつらは、いつの間にか、風のように去っていっ
た。

「ありがとう。」

アマさんが、私に言った。もやもやした気持ちが一
気に吹き飛ばようなひびきだった。私の心は、焼き
たてのパンのようにほかほかになった。今まで聞い
たこともなかった、魔法の言葉。そのたった一言が、
私に生きる力をあたえてくれた。

アマさんは続けて口を開いた。

「あいつらは、私を助けているあなたの姿を見て、
おく病ではなく、勇かんなんだと思つて助け
た
んじゃよ。」

「えっ、私が勇かん。」

おどろきと喜びが混ざった感情が、一気にあふれた。
こんな私でも、相手から感謝されること、自分の存
在を認めてくれる仲間がいること、それが、何より
もうれしく思えた。

夜が明けた。

「ううん。朝の空気は、気持ちいい。」

朝のさわやかな空気とまぶしい太陽の光に包まれな
がら、今日も、私は、アマさんのおしりを追っかけ
ている。たまに、よだれをたらしながら。